

2017年

九州大学山岳部

春合宿報告書

～春合宿計画書～

文責 山崎

山城：赤岳～阿弥陀岳

日程：3 / 14～19（2日予備日）

目的

全体：リーダーシップの向上、雪上技術の取得、八ヶ岳概念把握、登頂

二年生：登山技術、判断力、指導力の向上

一年生：上級生となるだけの知識を身につける

参加メンバー

三年：山崎（SL）

二年：明坂（CL）、池田、土屋、山田

一年：荒木、伊藤、池崎、須賀

行動予定

3月14日：出発～京都～美濃戸口

15日：美濃戸口～美濃戸～行者小屋（4h）

16日：行者小屋～地蔵ノ頭～赤岳～阿弥陀岳～中岳のコル～行者小屋
（6.5h）

17日：下山～帰福

※ 一年生の様子や天候次第では赤岳往復その際帰り道は文三郎道尾根を行く。

～行動記録～

3月15日

天候：晴れのち曇り

7：50 美濃戸口

8：10 出発

8：53 美濃戸

11：10 行者小屋

茅野駅からタクシーに乗り、美濃戸口に着くと、あたりはまばらに雪が着いており、ワカンの出番は一切ないことを悟る。美濃戸から赤岳山荘までは車の行き来が多いのだろう、轍がびっしり着いていて道迷いの心配がなく、快適に登山ができる。美濃戸からようやく本格的な登山が始まるのだが、トレースがあり、また雪の量も少なく、すいすい進んだ。晴れてはいたが、風が冷たかった。

行者小屋までは緩やかな斜面を延々に登って行くもので、フル歩荷であったが、部員全員体力的には余裕があったように思われる。また、最初は赤テープが多くはっており、道迷いの心配はないが、中盤から印が少なくなるので、トレースがない状態では、道迷いの心配があるだろう。

行者小屋では、既にテントが2、3張あったが、テン場はかなり広く、余裕をもって幕営できた。夕方から天候が悪くなりはじめ、気温がかなり下がった。

天気図を明坂が書いたのだが、西高東低冬型の気圧配置で、明日の天候が不安であったが、ネットの予報では晴れの予報であったので、7：00まで天候が悪ければ、沈殿するとのことであった。

3月16日

天候：晴れ

5：00 起床

6 : 0 0 出発
7 : 0 5 地蔵の頭
7 : 4 5 赤岳
9 : 0 5 中岳
1 0 : 0 5 阿弥陀岳
1 1 : 2 0 中岳
1 1 : 4 5 文三郎分岐
1 2 : 3 0 行者小屋

起床し、テントから頭を出すと、風も雲もなく最高のアタック日和になることが約束されたような天候であった。昨日の荒れるかも知れないというのは何だったのだろう。天候の予想はこれからの改善点であろう。

地蔵尾根も山頂までびっしりトレースが着いており、ラッセルもなくかなりのハイペースで登ることができた。40分ほど登るととんでもない斜面が顔を出し、1年生の様子心配となったが、平気な顔で登ってきたので、安心した。

地蔵の頭直下の斜面にはほとんどトレースがなく、広い尾根を慎重に登ってゆく。地蔵の頭に着くと富士山がお出迎えをしてくれた。赤岳はすぐそこにあり、八ヶ岳のスケールの小ささを感じた。

難なく赤岳を登り、中岳へ向かうのだが、斜面が急な下りであったので、安全をとって、アンザイレンをして下る。

中岳を下りコルに下りたが、雪の感触がいつもと違い、雪崩の危険も考慮しながらの登山となった。

阿弥陀岳は30度を超える斜面で、ようやく登りがいのある登山ができ、1年生もしっかり上級生についてきて、上級生は1年生の安全を考えながら、登山をしていて、成長を感じた。

阿弥陀岳山頂では風もあまりなく、長居した。

下りはかなり緊張したが、全員安全に下ることができた。中岳のコルから沢を下る計画であったが、雪の状態が悪く、弱層テストをすると手首に力を入れただけで崩れたので、安全を考慮し、文三郎尾根から下山することにした。

3月17日

天候：晴れ

6 : 0 0 起床
7 : 0 5 出発
8 : 0 5 美濃戸
8 : 4 5 美濃戸口

テント撤収し、すぐに下山を開始する。

すれ違いで登ってくるパーティが5、6隊あり、八ヶ岳の人気の伺えた。

下の方は、人々に踏み固められた雪が氷になっており、今回の合宿で最も気を使う登山となった。多くの部員が滑りこけた。阿弥陀岳がこのような状態であったのなら安全に下ることはできなかったであろう。とんでもないスピードで下っていったが、不思議と疲労はなく、1年間の部活がようやく終わることがうれしく、足が前へ前へと進んでいった。

赤岳山荘のアイスクライミング場の氷はまだ溶けておらず、多くの車が停めてあった。

美濃戸口までの道は、がっちがちに固められおり、滑りながらの下山となった。

～個人反省～

三年 山崎 史也

山岳部の現役として最後の合宿であったが、参加者全員目指す山に登ることができて本当に良かった。チーフリーダーとして八ヶ岳の登山は正直に言うところかなりイージーであった。だが、ものごとの難易度に関わらず、リーダーとしてチームのあらゆる管理、判断ができ、この1年の集大成であったと思う。これから私は社会に出て行くことになるが、山岳部で活動した三年間は全てかけがえない経験として、将来に活かすことができると感じている。三年間ご指導していただいたOBの方々には感謝しかありません。ありがとうございました。

二年 明坂

今回の合宿で最も反省するべき点は、赤岳および阿弥陀岳の下降の際のコンテニューアス、スタカットの判断である。赤岳では大丈夫だろうとほとんどコンテニューアスで行動したのだが、先頭の自分がスリップしかけ、肝を冷やしてからやっぱりスタカットで行こうと判断した。阿弥陀岳では逆に、慎重になりすぎてコンテニューアスでも大丈夫な傾斜でもスタカットを続けてしまい、必要以上に時間をかけてしまった。ザイルパーティーの実力や体調、雪の量や状態、天候や行動時間などを総合して判断する能力に不足を感じた。次の合宿からは自分の判断がさらに重要になってくるので、知識をつけるなり今までの合宿での先輩方の判断を思い返すなりして、判断力を磨かなければならないと思った。

また、今回の合宿では朝テントから出るのが非常に遅くなってしまった。荷物の準備については、アタックザックがあれば時間を短縮できると切に感じた。

二年 池田

今回の春合宿は2年生最後の合宿であり、3年生になるうえでの準備をする最後の合宿となった。2泊3日という短い行程の春山であったがしっかりと2つの山に登ることができていい経験ができたように思う。初めて八ヶ岳に行ったわけだが、北アルプスに比べてスケールが小さくお手頃な感じがしたのが率直な感想だ。ただそうはいっても急な斜面は多く、今回の合宿の1か月ほど前には他大学のパーティーが阿弥陀岳で滑落し死亡する事故があったので常に危険だということは頭の中にあった。また中岳沢は雪崩が多いということも意識でき

ており、事前に危険個所を確認できていたのはよかったと思う。これから山岳部の中では最上級生になるわけだが、まだまだ知識も経験も足りていないところが多い。先輩方から学んできたことに加え、書籍などでも山に関する知識、事故を回避する判断などを学んでいきたい。今後は行動時に自分のことだけを見るのではなく、まわりや後輩の行動もしっかりと把握できるようになりたい。後輩に何かあったら先輩である僕らの責任だということを心に刻んでおきたい。

二年 土屋

私が合宿に参加したのはこれが5度目であるが、今回の合宿が私にとっては最も苦しく感じた。おそらくその要因は、エッセンを食べなかったことにあると考えている。入山日、身体の状態は万全ではなく、そこからのスタートであったため、体感の疲労度はかなり大きなものであった。そのためあまり食欲もわかず、行動中エッセンを食べることはなかった。このことが体力の回復を遅らせたのだと思う。また、一日のなかのどこかのタイミングで何かを口にしていなくて夕食ものどを通りにくくなるということも今回の合宿で経験することができた。夕食を満足に食べることができなければ翌日に体が十分に回復することなど望めるはずもない。エッセンが何のためにあるのかをもっと考えるべきであった。また、合宿始まって以来、テントでなかなか寝付けない日があった。私はテントという過酷な環境でも比較的早く眠ることができる方だと自負していたが、それを覆された。なぜそのようになったのか理由はわからないが、このことをあまり気にしすぎないことが最善策だと考える。

また一年生にテント生活を教えるという仕事を、同期に一任してしまっているところもあった。今年から早いもので自分たちが最上級生になる。後輩に気が付いたことがあれば積極的に教えていくような姿勢を忘れず、私が尊敬する先輩方のようにになりたいと思う。

二年 山田

アタック日に体調を崩し、吐き気やめまいを起こしペースが大変遅れてしまった。とても悔しかった。原因は水分不足と睡眠不足が考えられる。水分不足に関してはなかなか行動中に補給するのは春山では難しいが休憩時には喉の渇きがなくとも積極的に補給するの必要が感じられた。また、塩分についても飴など小

さなエッセンはポッケに常備しておき、行動中にでも摂れるようにしていきたい。睡眠不足に関しては毎度、合宿で苦悩する件である。色々と自分でも調べてみたが核心を突くような解答は得られなかった。アタック前日は常に脚がエレベーションされている状態で不快だった点、興奮していた点が当日に尾を引いたと考えられる。リラックスできる体位で休息するべきであった。興奮に関しては仕方がない。宝満、若杉の前日も興奮であまり眠れない。睡眠導入剤を処方してもらい、どうしても眠れないときは服用しなければならないのかな？と少し頭をかすめている。

今合宿が終了し、いよいよ部活も幹部学年となってしまった。モチベーションしかありません。先輩に教わったことを後輩に伝えていくべく気を引き締めて頑張っていきたい。

1年 伊藤

初の雪山ということで不安がないとは言い切れなかったが、先輩からの声掛けのおかげで余計な不安を抱えずに臨むことができた。朝の準備は行動がもたついてしまった。前の晩からできるだけの準備をしておくべきだった。行動中は注意力が低下して何度もザイルを踏んでしまった。あらゆることに対して緊張の糸を途切れさせてはいけないと改めて感じた。また、ふくらはぎがばてることが怖く、急登でベタ足になってしまうことがあったため、今度からは考えられる不安要素は払しょくして臨みたい。文三郎尾根の下りは気を付けて下ったつもりが、膝にやや痛みを覚えた。長い下りで痛みを覚えるのは夏の合戦尾根でも経験していたことだったので、改めて課題ととらえ、解消のためにトレーニングしていきたい。歩荷量が少なかったことも反省点だ。

アタック前日は曇りの予報が出て沈殿の可能性もちらついたが、起きてみると天候はよく、予測の難しさを体感した。赤岳の山頂に立てた時はうれしかった。それと同時に、周りの先輩や同期の力を借りなければ自分はこの場には立てなかつたろうと感じた。一年間の総まとめとなるはずの場所で感じたことは自分の非力ばかりだったが、これからも日々の活動を地道に行っていきたいと思った。

1年 池崎

係の仕事以外で反省すべき点は山域調査が不十分だった点だ。これは今回の合宿だけでなく一年を通してだ。毎回山ブログのようなものは一通り目を通すが、地形や方角が頭にほとんど入っていなかった。次からは自分が連れて行くのだという気持ちできちんと把握しておきたいと思う。今合宿で良かった点は冬合宿の反省を生かし、準備を素早く、一足先にすることでほとんど人を待たせることなしに行動できた点だ。続けていきたい。また下り坂のアイゼン歩行は冬に滑落して怖い思いをしたが、今回は適度な慣れと緊張でかなり安全にできたと思う。まだ雪壁のようなところでも野北での練習のおかげかしっかり足を差し込んで体重を乗せることができた。来年の冬山も安全に登りたい。

1年 須賀

今回の合宿で僕が反省すべき点は2つ、テント生活における段取り、見通し、手際の悪さと、先輩に対する甘えだと思えます。一つ目について、テントを建てる、テント内に荷物を入れる、食事を作るといった時に、次に何をするのかを考えられずにいました。長い時間を同じテントで過ごす仲間に無駄なストレスを与えてしまったのではないかと思います。全体では次に何をするのか、全体の行動の間に個人的な行動をどう組み込むのかということを考えて行動していきたいです。二つ目について、全体での日程から四人での後期日程に移るときに、何を引き継ぐかの決定がほとんど先輩任せになってしまいました。今後は積極的に複雑なことにも関わり、他人任せにしないようしなければいけないと思いました。

感想： 今合宿では、全体での赤岳～阿弥陀岳縦走と、希望者四人による後期日程の阿弥陀岳北陵登攀、ジョウゴ沢でのアイスクライミングに参加しました。赤岳阿弥陀岳縦走は、天気が良く、ザックは軽く、距離も短かったので、景色や先輩の歩き姿を見る余裕がありました。地蔵尾根から地蔵の頭に出た時に見えた太陽と富士山の姿は本当に綺麗で、思わず声が漏れるほどでした。反対側の西方には雪を纏った南アルプスの山々が見え、いつか行ってみたいという気持ちが湧きました。アイスクライミングでは、当初はこちらの方が後日日程のメインだったのですが、赤岳鉱泉のアイスキャンディを経験者不在のため利用することが出来ず、ジョウゴ沢ではハーケンが抜けて先輩が懸垂下降中にグラウンドフ

オールするという事件があったので、少ししか楽しむことが出来ませんでした。僕が登ったのは2本だけですが、「これは楽しいぞ」という手応えのようなものを感じることが出来ました。来年こそは米澤先生にご協力をお願いして、しっかりアイスクライミングをしたいなと思っています。阿弥陀岳北陵は、ルートとしては易しい所だったのですが、冬季のバリエーションということもあり、山頂に立った時にはものすごく達成感がありました。三人の先輩方には惜しげのない安全確保や声かけをしてもらい、自分は本当に恵まれているなと感じます。後輩が行きたがれば足手まといになっても連れていってくれる先輩方の心意気に応えることが出来るよう、もっとトレーニングを頑張りたいと思います。

～係反省～

・ 装備

計画は1年生2人に分担して作成させ、すこしずつ添削する形を取った。1年生は各装備をどのように使うのか、何個用意するのかなどを想定することができていたと思う。反省としては、1年生に分担させる際にいくつか装備が抜け落ちてしまっていた。結局は計画書に問題は生じなかったのだが、トランシーバーの確認で池崎を奔走させてしまったのは申し訳ない。

また、これは合宿後のアイスクライミングについてなのだが、エスパースのポールを引き継ぎ忘れてしまい、現地でわざわざ購入する羽目になってしまった。エスパースのポールも替え時が近かったため、完全に無駄というわけではないが、要らぬ出費が生じてしまった。(明坂)

装備係は、合宿前にやることしかなく、反省は特にない。装備表の作成と精練の仕方をしっかり見れたのは良かった。共装の回収まで責任を持ってやりたい。(須賀)

今回の春合宿では装備係をした。反省すべき点は必要な装備は何か吟味するということが足りなかった点、部室の装備確認が不十分だった点だ。考えれば今回の合宿で使う機会がないとわかるトランシーバーを装備表に書いてあるからといって、出発前日に必死で探していた。事前に本当に必要なのか判断できていなかったからだ。二つの点の原因は、そもそも装備の名前しか知らず、実際はどういうもので、どのように使うのか理解できていなかったからだ。今回の合宿を通して装備についてはある程度わかったので、その点は良かったと思う。(池崎)

・ 交通

今回、私は交通を務めたが完璧であった。特に反省点はない。予約、計画段階から一年が主体となり執り行ってもらったが積極的に動いており逐一、報告・連絡を徹底してくれて来年度は安泰であると胸を撫でおろした。(山田)

初の担当であった。仮のプランを立ててみたが、プランありきで細かいところ

を確認していなかったため、乗り換えのスケジュールが現実感のないものとなってしまい、先輩に訂正してもらうことになってしまった。きちんと細かなところまでイメージして確認しておくべきだった。(伊藤)

・医療

医療係に初めてなった。係が1人だったので医療箱の中身を確認したり、応急処置の仕方などを覚えたりする合宿前の準備は大変だったが、合宿中に大きなケガをする部員もおらず無事に役目を終えることができひとまずは良かったと思う。ただ医療係を経験して、反省しなければならない点もいくつかあった。

まずは、医療箱の中身をもっと整頓することだ。今回の行程は春合宿ということもあり短かったにもかかわらず、絆創膏が多かったり、逆に内服薬が明らかに少なかったりした。またその医療用具がいつ購入したものかがわからないために、期限が過ぎていないのか不安なものもあった。もっと今回の春合宿に見合った医療箱になるようにいじる必要があったと思う。次の夏合宿では行程が長くなり野菜なども不足するので、ビタミン剤などを取り入れてもいいと思う。新たに用具を購入するには部費と照らし合わせながら考える必要があるが、緊急時に備えて万全の医療用具を取りそろえられるようにしておきたい。

次に、医療箱を1人でもって行動していたことだ。いつもなら医療係は2人いるので、それぞれが1つずつ医療箱を持つことになるのだが、今回は自分が2つとも持って行動してしまった。万が一自分が隊から離れてしまったときや隊が二分されてしまったときには対処できない可能性が高かったので今後は気を付けたい。

最後に応急処置の仕方の定着度だ。山においてなんらかの事故が起こる可能性は高いので、それに備えて医療係は応急処置をしっかりと覚えておく義務があると思う。自分も止血法や固定法を事前に学習したが、1週間前から急に詰め込んだのでしっかりと定着していたとはいえる状況ではなかった。ましてや事故が発生した状況などパニックに陥る可能性もあるので、普段から部員全員が応急処置を行える体制を整えていた方がいいのではないかと考える。(池田)

・食料

今合宿は食料係を担当した。出発前の準備段階では後輩がしっかりと計画表やエッセンリストを作ってくれたため、自分が行う作業としてはそれに不備がないかを確認することや、アドバイスを付け加える程度のものであった。後輩がしっかりと成長していることを実感することができた。計画段階で合宿参加人数が変動し計算をやり直すことになる、また買い出し・ペミカンづくりの役割分担を一人でせざるを得なくなるなど、当日はあわただしい様子になってしまったが、各人が迅速に動いてくれたため、予想していたよりも早く作業を終えることができた。みんなに感謝したい。

合宿中の反省としては、紅茶の存在を完全に忘れてしまっていたことをまず顧みるべきだろう。紅茶に関しては春合宿だけでなく冬合宿でも精神のよりどころにするものであるが、前回の冬合宿ではある事情からテント単位で紅茶を作ることができなかった。また、不幸にも今回食糧計画に携わった一年生も当時同じテントのメンバーであったので、紅茶の存在を知ることはなかったのだろう。計画に紅茶が抜けていることに気が付かなかったのは自分の責任である。今後は紅茶を持っていくことを忘れないようにしたい。

また、今回はペミカンの中身を以前のものから少々変更して臨んだ合宿でもあった。例えば、従来使用していたベーコンを豚バラブロックに変更し、量もはるかに多くしてみた。切り方も肉を細かくするのではなく、肉の触感を感じるようにワイルドに切ってあったので、その存在を十分楽しむことができた。ただ、味付けに調味料を用いないこと、水分が抜けてしまっていることから舌触りはややパサパサしており、味もベーコンに比べうまみを感じられなかった。この点を考慮して、いくらかコストはかかるが、従来通りにベーコンを用いることをお勧めする。もう一つ変更点は、具材にしめじを追加したことであった。これは個人的に評価したい点である。私がキノコ好きというのもあるが、なによりしめじの触感が素晴らしかった。調理の過程で触感が奪われてしまうのではないかと心配していたが、杞憂に終わった。今後のペミカンづくりにおいてもしめじのスタメン入りを検討してもよいのではなかろうか。(土屋)